

## 私の患者さんは実習指導者

実習で受け持った患者は、胃がんで胃全摘出術を一週間後に控えている 80 歳代男性であった。吃逆、喀痰、食欲不振等の症状がみられた。A氏は口数が少なく、学生を警戒していると感じた。私は実習生として何事も学ばせてもらうという姿勢で話を傾聴した。A氏は徐々に心を開いてくださり、「若い頃は三度の飯より遊びだった。」「営業職で毎日、忙しかった。」等、色々な話をして下さるようになった。病気の話は、患者を不安にさせないよう意識的に話さなかったが、手術を翌週に控え、「来週にはいないかも…」「もっと早くがんが見つかっていれば…」という不安や後悔の気持ちを自ら話して下さった。私は、A氏の不安な思いを言葉にして吐き出せるよう、じっくり話を聞いた。A氏の「また来週、待つとるちや。」という言葉で、その日の実習を終えた。

術後は、持続的硬膜外麻酔の副作用で意識がもうろうとし、手術をした記憶もない、日時や場所もわからない日もあった。術後 1 日目の全身清拭時には痛みを耐えられず、「下手くそ！」と怒りをぶつけられた。術後の援助は、患者に苦痛を与えないよう手際良く、かつ清潔に援助することがとても大切だと学んだ。

離床が可能となってからは、日に日に回復の速度は早まり、患者の意欲も高まっていることがADLやコミュニケーションから理解することができた。意欲的にリハビリを行うA氏に、「患者にとって満足のできるリハビリとは何だと思う？」と問われた。「リハビリをすることばかりに気を取られることなく、患者の話をよく聞き、辛い時間を短く感じさせてくれる気づかいのあることだ。」と言われた。私は自身の看護について振り返り、常にこのことを意識することにした。

A氏は治療、リハビリ、看護について一つ一つ説明を求められ、納得するまで話す方であった。私が行う援助についても、説明不足の場合は効果や目的を問い、計画の見直しを求めることもあった。援助後は、「高さの調節が必要。」「気持ち良かった。」等と評価して下さった。A氏は私の存在を認め、厳しい目で見守る、もう一人の指導者であった。

実習最終日、お礼と別れを告げると、「俺はもう大丈夫。勉強になったか？」と言葉に詰まりながらも、気丈に振る舞うA氏の目には涙が浮かんでいた。退院日は決まったが、抗がん剤の治療が残っており、不安のある中で、私が去ることを告げるのはとても心苦しかったが、長い時間を共に過ごさせて頂いたことに感謝し、「ありがとうございました。」と伝え、握手を交わした。A氏の大きな手のぬくもりが今でも忘れられない。A氏から学んだ、「患者の話をよく聞き、辛い時間を短く感じさせてくれる気づかいのある人」となることが、私の看護師としての目標である。